

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



読書とは、宝の山への旅



各クラスで本の貸し借りがスタートしました。

図書館担当の吉賀先生がアプリの使い方、本を読むときのルールなどを一つずつ教えてくれました。

読書とは、心と頭への見えない貯金です。

新しい考え方に出会い、新しい言葉を知り、時に冒険し、時に迷い、そし

て時に感動する。

そして、一冊の本との出会いがその人の生き方を変える時さえあります。

「国語の力がつく」「読解力がつく」そんな簡単な言葉では片づけられないほどの無限の学びが読書にはあります。

「読書とは、宝の山への旅」という言葉もあるほどです。

「子どもに読書の習慣をつけることは、数千万円の財産を残すことよりも価値あること」とすら昔から言い伝えられてきました。

子どもの内にぜひとも身につけておきたい習慣ともいえるでしょう。

習慣化するためには、大きく2つのことが必要です。

一つは、面白い本との「出会い」です。

そしてもう一つが、「読破感」をたくさん感じることです。

読破感とは、本を読み切った後の充実感です。

「読み終わったぞ！」という達成感は、次の本に向かう何よりの原動力になります。



その「読破感」という名の達成感を得る上では「背伸びをする」という体験が非常に効果的です。

私が小学一年生の頃、「大人のふりかけ」という商品が発売されました。

普段私は、特にふりかけを好んで食べるタイプではありませんでした。

しかし、「大人のふりかけ」のCMを見て、私は無性にそのふりかけが食べてみたくなった記憶があります。

ちなみにこの商品は、「ふりかけ消費者が12才を境に急激に減少する」というデータをヒントに、どの世代にも満足できるふりかけを作ろうというコンセプトの元、作られたものだそうです。

子どもが大人を真似するCMが話題となり、大人のふりかけはヒットし

ました。

ロングセラー商品ともなり、「食品ヒット大賞」も受賞したほどです。

いつの時代も、子どもは背伸びして大人と同じことをしてみたいものなんだろうなあと思います。

そして、これは読書においても同じことがいえます。

1年生の教室の並びにあるスペースには、私が読んできた本の一部を置いてあります。

だいたい1000冊くらいあります。

全て、大人向けの本ばかりで子どもたちが読むようなものではありません。

でも、今まで担任してきたクラスの子たちは、全員例外なくその本に手を伸ばしました。

こういうのも読むんだよ。

なんてことは一度も言ったことはありません。

けれども、手を伸ばすのです。

そして、続々と感想を伝えに来るようになりました。

ジェームズアレンを借りていった子が「これ、お母さんが大学生の時に読んでって言ってました！」と教えてくれたり、「とにかく面白い本が読みたいんです！」と大人の本の紹介を求めてきたり。

中にはアドラー心理学の本を読み始める子もいました。

さらに、哲学者の本にのめりこんだ子もいました。

「先生今日これ借りて行っていいですか？」

と、小学生が分厚いニーチェの本を持ってくるのです。

学校からニーチェの本を借りてきて家で読書にふける小学生。

実際に、過去に受け持った学級で幾度となく実現した出来事です。

さらに面白いのは、「読書リクエスト」をしてくる子もいました。

それは、昼休みの出来事でした。（札幌で6年生を担当していた時のことです。）

「先生、昔にあったことをいつまでもひきずっちゃうんですけど、それを乗り越えられる本ってありますか？」

あまりに具体的なリクエストに驚きました。

ここまでくると、もはや教師としての仕事ではなくなってきていることは間違いないんですが、私は心躍りました。

なぜなら、「読書ソムリエ」（私の造語）を本気で目指しているからです。

その人には、その人にピッタリの本が存在します。

悩みや願いや希望や夢。

その人の思いに沿う一冊は、世界に確実に存在すると確信しています。

「とにかくウツリしたい」

そうした思いにピッタリのワインを鮮やかに示すことができるソムリエのように、その人の思いにピッタリと重なる一冊が紹介できればこれほど素晴らしいことはないと思っています。

先のリクエストに話を戻すと、私は書架から 2 冊の本を抜き取り、その子に手渡しました。

その時、次の言葉を添えました。

「きっと、〇〇が昔のことを引きずっていることは、自分では気づいていない「目的」があるからだと思うよ。引きずることによって、何か自分にとってよいことが起きている。昔のことを思い出すことによって、自分に何かプラスのことが起きる。その目的が分かれば、スッキリとするかもしれないね。この本には、その目的の見つけ方が書いてあるよ。」

その子はとても嬉しそうに「ありがとうございます！」と大人向けの本を持って帰りました。

そうそう、「いわた書店」をご存じでしょうか。

「プロフェッショナル～仕事の流儀～」というテレビ番組で紹介された北海道の本屋さんです。

このお店は、あるサービスをしていることで話題となりました。

それが、「一万円選書」（店長である岩田さんが、一万円分の本を選んでくれるサービス）です。

この話を知った時は大きな衝撃を受けました。

何て素敵な仕事（サービス）なんだ、と思いました。

これは人気が殺到するに違いないと番組を見ながら思っていた記憶があります。

実際に「一万円選書」は、その希望者があまりに多いためにすでに抽選制となりました。

岩田さんが一人で選んでいる一万円選書に、今では 7000 人以上の希望者が殺到しているといえます。

このサービスの面白い点は、抽選で当選した方にまず「カルテ」を書いてもらうことです。

一部を紹介します。

- ・ **年齢や家族構成、職業を教えてください**
- ・ **あなたがこれまでに読んだ本で印象に残っているベスト 20 を教えてください**
- ・ **人生でうれしかったこと、辛かったこと**
- ・ **あなたにとって諦めたくないこと**
- ・ **何歳のときの自分が好きか**
- ・ **これだけはしないと決めていること**
- ・ **一番したいことはなんですか？**
- ・ **あなたにとって幸福とは？**
- ・ **人生で大切にしていることは？**
- ・ **何歳の自分が好きですか？**
- ・ **上手に歳を取ることができていると思いますか？**

このカルテを読んで、岩田さんがあなたのためだけに本を選んでくれる仕組みになっています。

めでたく当選した方には、こんな手紙がカルテと共に同封されて送られてくるそうです。

一万円選書のご注文をありがとうございます。約 7700 通の応募の中から当選おめでとうございます。僕はただの本屋のおやじでしかありません。できることは、お客さまの話を聞いて、参考になりそうな本を紹介するぐらいです。

この一万円選書をやってきて分かったことがあります。お客さま自身が、これまでを振り返るとともに自分の人生を立ち止まって考えるいい機会にされているということ。

いまのうちに誰かに会っておくべき人がいるのでは？大切な人に大事な話をしておくべきではなかろうか？と、自然と考えられるようです。

こんなふうに、少し落ち着いて、違った切り口、別の視点を探り始めた人に僕は参考になりそうな本を提示するだけです。答えはお客さま自身がすでに見つけられているようです。選書カルテにじっくり書き込むという作業自体がすでに良い結果を招いているようなのです。この一万円選書は、お客さまご自身の内側の力によって成り立っているのです。

僕は先日 66 歳になりました。この歳になってなりたかった本屋に少しずつですがやっと近づけた気がします。

数年前には店を畳もうかと追い詰められていたのにですよ。人生は何が起きる

かわかりません。まだまだこれから。

勝負の行方は最終回の裏表。アディショナルタイムの攻防にかかっています。これからが本当に生きてい人生を生きられるという気がしてきました。

ということで、貴方様に以下の本を選ばせていただきます。

一万円選書のサービス、高校生からご高齢の方まで幅広く利用されているそうです

このサービスを提供できるのは、ほかならぬ岩田店長の豊富な読書量によるものでしょう。

数多くの本を読み、その人のニーズに合った一冊が浮かぶようになって初めてこうした選書が出来るようになるのだと思います。

店長がどの程度本を読むのかは知りませんが、読書ソムリエを目指す者として、店長には及ばずともたくさん本を通過し、知っておきたいと思っています。

大体今の所、月に読んでいる本数は30~40冊くらいでしょうか。

教育書や雑誌その他を含めると50冊は少なくとも読んでいます。

最近、知人や友人から「おススメの一冊を教えてください」という連絡が結構入るようになってきました。

岩田店長に追いつき追い越せの精神で、これからも読書ライフを楽しんでいこうと思います。

話を戻します。

「読書が好きになる」には、やはり環境も大事なのだと思います。

1冊や2冊ではなく、ずらりと並んだ背表紙の中から1冊だけ選んで取り出すのも読書の醍醐味だからです。

ちなみに私は上の娘2人には「童話館ブッククラブ」というサービスで、児童書のプロに毎月本を選んで送ってもらっています。

家の絵本の蔵書数も、100はゆうに超えています。

「何歳何か月で読むにはこれがおススメです。」

その道の専門家が、豊富な経験をもとに選んでくれた本は、やっぱり素晴らしいです。

娘たちは、月に一回届くその本をととても楽しみにしています。

それから、「しるし書店」というサービスをご存じでしょうか。

読んだ人の折り目や印がついた本。

それが、ただの古本ではなく新品よりも価値がついて取引されているサービスです。

たとえば、「ソフトバンクの孫会長が読んだ本」と聞いたらかなりの方が興味を惹かれることと思います。

さらに、そこに書き込みや折り目が入っていたら。

その本の価値は、一気に高まるでしょう。

こうして生まれたのが「しるし書店」というサービスです。

一万円選書。

童話館ブッククラブ。

しるし書店。

「本を買う」という一つの行動であっても、現代は様々な選択肢が生まれています。

そして、新しい「付加価値」が続々と生まれてきています。

「図書室で本を借りて読む」という従来の方法だけでなく、いろいろなやり方を知って、そこから自分のニーズにあったものを選ぶことで、読書の楽しみは何倍にも広がっていくことと思っています。

子どもたちの本との出会いの瞬間を見守り、読破感や色んな付加価値を読書にプラスできるように、自分自身も本へのアンテナを高く過ごしていきたいと思っています。(文責：渡辺道治) ご感想はこちらから↓

<https://docs.google.com/forms/d/1DoRWC86GgFFKAY0oi7CTk6XcbykJgZ7y9xbvViZBZ-k/edit>

北国の小さな本屋が
起こした奇跡の物語

ポプラ新書

選書 一万円

1冊
「プロフェッショナル
仕事の流儀」
他で話題
初書籍化

3千人待ち! いわた書店流
この人のお薦めだから、
読みたい。
この人の言葉だから、
読みたい。

本をどう選び、
どう読むか。

加納朋子小坂節
氏応援

岩田 徹
北海道いわた書店 店主